



## 天 界 新 知 識

### 天球を48等分する方法

統計天文学の大家 C. V. L. Charlier 博士は、研究の必要上、全天を48等分する方法を Lund 天文臺発行の Meddelanden, Ser, II, No. 8及9に発表したことがあつた。其の方法は、

- |                           |   |
|---------------------------|---|
| $A_1, A_2$                | (赤緯 $+66^{\circ} 26.6'$ 以北を2等分したもの)                 |
| $B_1, B_2, \dots, B_{10}$ | (赤緯 $+30^{\circ}$ 乃至 $+66^{\circ} 26.6'$ を10等分したもの) |
| $C_1, C_2, \dots, C_{12}$ | (赤緯 $0^{\circ}$ 乃至 $+30^{\circ}$ を12等分したもの)         |
| $D_1, D_2, \dots, D_{12}$ | (赤緯 $0^{\circ}$ 乃至 $-30^{\circ}$ を12等分したもの)         |
| $E_1, E_2, \dots, E_{10}$ | (赤緯 $-30^{\circ}$ 乃至 $-66^{\circ} 26.6'$ を10等分したもの) |
| $F_1, F_2$                | (赤緯 $-66^{\circ} 26.6'$ 以南を2等分したもの)                 |

近頃デンマルク國コペンハーゲン大學天文臺の Börge Svanhof 氏は、上と全く同様な方法で、天空を銀經銀緯によつて48等分し、之れにより等分された天空を、赤經赤緯の線と直接に比較し得る便利な圖を作つた。但し、銀河の北極は

$$A(1900.0) = 12^{\text{h}} 40^{\text{m}} \quad D(1900.0) = +28^{\circ}$$

といふ位置を採用してゐる。[A. N. 5985]

### 米國ワシントン天文臺の緯度變化の寫眞觀測

ワシントンの海軍天文臺では1916年以來寫眞天頂儀による緯度變化の觀測をしてゐた F. B. Littel 氏が1933年二月末日を以つて退職したと同時に、1932.0—1933.0年の觀測結果の計算も首尾よく終り、A. J. 1000號に發表された。乾板は J. D. Phenix 氏が測定した。各星の測定による緯度の公算誤差は  $\pm 0.''082$ 、各夜9星以上の測定の平均値の誤差は  $\pm 0.''045$  である。又、アベラシオン恒数は  $20.''462 \pm 0.''013$ 、過去17年間から直接平均恒数は  $20.''446$ 、又、重みを考慮した平均は  $20.''448 - 0.''0038$  である。

### 小遊星(784)ピケリングヤの軌道

此の Pickeringia 星は1914年に発見され、Berberich 氏が最初に軌道を算出したものであるが、今般米國 Vassar 女子大學の M. W. Makemson 女史は1920, 1921, 1922,

1925, 1926, 1928, 1932の各年度の各地の観測結果を用ゐて、G. Stracke 氏の方法〔VRI 44〕により下の如き軌道(と推算表をも)を計算した〔A.N. 5985〕

E=	1919年二月04.5日	1933年十一月19.5	1935年一月08.0 U.T.
M=	270.°307	163.°188	237.°763
$\omega$ =	235.112	234.875	235.040
$\Omega$ =	16.404	16.370	16.568
$i$ =	12.436	12.433	12.461
$\phi$ =	13.274	13.707	13.733
log a=	0.49290	0.49132	0.49114
$\mu$ =	646.〃624		

### 小遊星(887)アリンダの軌道

多くの小遊星中、(719) Albert, (944) Hidalgo, (1009) Sirene, (1036) Ganymed, (1134) Kepler, (1221) Amor の六星と共に、(887) Alinda は、軌道の離心率が 0.45 乃至 0.65 といふ珍らしい大きさなので特に有名であるが、ガニメド星以外のものは皆光りが極めて微弱なため、殆んど皆、近日點の附近で對衝となる時のみ観測が行はれ、従つて、位置の推算は困難が多い。中にもアルバート星は、1911年度に見えた切り、永く見失はれ、今は再発見も殆んど絶望である。

アリンダ星は1918年二月3日にハイデルベルヒ天文臺の M. Wolf 氏が11級として発見し、1918DB と假稱せられたもので、週期が4.02年だから、凡そ4年毎に近日點對衝となる。発見以來、世界各天文臺での精密観測は下の如く。

1918年度には	107回	1925—1926年度	13回
1921—1922年度	18回	1929—1930年度	1回

漸次減少してゐるのは遺憾である。今1933—1934年度は又此の星の観測期であるけれど、光輝も淡いし、或は誰も観測を勵まないかも知れないことを慮へて、獨國計算局の Stracke 博士は此の星の軌道を徹底的に改算し、推算位置を A.N. 5980 及 5985 に發表した。同氏が最後に決定した軌道“E”は

E=	1918年三月16.0日 G.M.T.	=	1925年一月08.0日 U.T.	
M=	17° 29' 20.〃27	=	267° 06' 52.〃26	
$\omega$ =	347 46 55.67	} (1918.0)	=	347 55 22.93
$\Omega$ =	110 53 45.49		=	110 52 10.12
$i$ =	8 57 27.59		=	8 58 51.27
$\phi$ =	32 11 16.75	=	32 20 01.22	
$\mu$ =	882.〃06085	=	883.30620	
log a=	0.4030054	=	0.4025969	

新小遊星三十一個の登録

本誌第143號第103頁に第1223番まで確定登録された小遊星は、今般又々31個を増し、下の如く番號や名稱を附せられることになつた。〔R. I. 798及835〕

番 號	符 號	發 見 者	名 稱
1224	1927 SD —	S. Beljawski	—
1225	1930 HK —	H. Van Gent	“Ariane”
1226	1930 HL —	—	“Golia”
1227	1931 TD —	K. Reinmuth	—
1228	1931 TU —	—	—
1229	1931 TP <sub>1</sub> —	—	—
1230	1931 TX <sub>1</sub> —	—	—
1231	1931 TE <sub>2</sub> —	—	—
1232	1931 TF <sub>2</sub> —	—	—
1233	1931 TG <sub>2</sub> =1927TB	—	—
1234	1931 UF =1933BN	—	—
1235	1931 UI —	—	—
1236	1931 VX —	G. Neujmin	—
1237	1931 XB =1908DA	G. Reiss	“Genevieve”
1238	1932 CA —	L. Volta	—
1239	1932 CB —	E. Delporte	—
1240	1932 CD —	R. Schorr	“Centenaria”
1241	1932 EB <sub>1</sub> —	H. E. Wood	“Dysona”
1242	1932 HL —	C. Jackson	—
1243	1932 IE —	E. L. Johnson	—
1244	1932 KE —	C. Jackson	—
1245	1932 KF =Σ86	—	—
1246	1932 OA —	—	—
1247	1932 QA —	Laugier 夫人	—
1248	1932 RO —	C. Jackson	—
1249	1932 VB —	K. Reinmuth	—
1250	1933 BD —	—	—
1251	1933 BE —	—	—
1252	1933 DG —	F. L. Whipple.	“Celestia”
1253	1931 TV <sub>1</sub> =1933BO	{ p. Schajn K. Reinmuth	—
1254	1933 IA —	J. Hartmann	“Erfordia”
1255	1933 NC —	G. Neujmin	—
1256	1932 PD —	K. Reinmuth	—
1257	1932 PE =1928QA	—	—
1258	1932 PG —	—	—
1259	1933 BT =1928FO =1929MA	—	—
1260	1933 BW —	—	—
1261	1933 FB —	E. Delporte	—
1262	1933 FE —	S. Arend	“Sniadeckia”
1263	1933 FF —	—	“Varsavia”
1264	1933 HG —	C. Jackson	—

又、(1190)は Pelagia, (1166)は Sakuntala と命名された。

尙ほ最近入手した「1934年度の小遊星表」によれば、今年中に對衝となる小遊星は總計966個であるが、觀測不充分のため、今全く行方不明の小遊星は次の7個である。

(155), (330), (392), (400), (452), (473), (515)。

### 米國の隕星聚集所

米國で最も多く隕星を集積してゐる所は次の如くである。

- (1) ワシントン府にある國立博物館(U. S. National Museum)
- (2) シカゴ市のフィールド博物館 (Field Museum)
- (3) ケンブリヂ市のハーバード大學 (Harvard University)
- (4) ニュヨーク市のアメリカ博物館 (American Museum of Natural History)
- (5) テンサ市のコロラド博物館 (Colorado Museum of Natural History)

因みに、このコロラド博物館のものは、近頃作られた隕星研究會の幹事 H. H. Nininger 氏が主として集めたもので、隕星の数は約180個。中に、メキシコから發見された Huizopa 號やニューメキシコで發見された Pojoaque 號も含まれてゐるが、此等は最近に發見されたものである。(P. A. 410)

### 獨曆基本恒星目錄修正表成る

元 A. Auwers が作つた恒星目錄は J. Peters が改正したもの[R. I. Veröf. 33] を現今ドイツ曆に用ゐてゐるのであるが、最近 Kopff 氏が更に之れを修正した表が出来上つた。之れを Dritte Fundamentalkatalog (略して FK3) と呼ぶ。之れの修正値、即ち

(FK3 — N.F.K)

の形のものが、A. N. 5995 に發表された。赤經は  $0.^s 001$  まで、赤緯は  $0.''01$  までである。此の新値は1940年度の獨曆に始めて用ゐられる筈であるが、來1934年中頃に發行される1936年度の獨曆には取り敢へず1934, 1935, 1936の三ヶ年度の修正値と、固有運動の修正値とが載せられる豫定である。

### マコニク天文臺の視差觀測結果

口径66cm (26吋) 屈折機による視差の寫眞觀測第17回報告が S. A. Mitchell, Sten Asklöf 兩氏によつて發表された。[A.J. 1000]

うち、肉眼星の絶對視差は下の如し。

46	Tauri	$0.''025$	v	Vir	$0.''023$
6'	Orionis	$-0.003$	Pi	14h 235	$0.033$
Boss	1703	$0.000$	6'	Ser	$0.007$
18	Mon.	$0.017$	$\beta$	Equ	$0.024$
t	CMa	$0.004$	72	Cyg	$-0.002$
21	Lyn	$0.001$			

### ジャワ島レムバン天文臺で恒星視差觀測

オランダ領の東印度ジャワ島バンドン市北郊 Lembang 天文臺から恒星の寫眞視差觀測第1回報告を入手した。此の天文臺は、去る1929年五月に我が山本會長が訪問され

た所であつて、ツアイヌ製口径60種二重望遠鏡を有つてゐる。今回は専ら南天の恒星視差を測定する目的で1930年から着手したものである。

元來、南空の恒星視差測定は、古くは D. Gill [Mem. R. A. S. 48 (1884); Cape Annals, 8, ii], 少し、降つて J. Voute [M. N. 77, 152 & 650; 79, 635; Ap. J. 48, 144] が Cape 天文臺で眼視的にやつた外は、最近1925年から F. Schlesinger 及 Alden 氏等が南阿の Johannesburg 市 Yale 天文臺出張所でやり、又、1930年來 Cape の新臺長 Spencer-Jones 氏が“Victoria望遠鏡”を用ゐてやりつゝあるのみ。故に1920年、上記 Java に Bosscha 氏寄附の大天文臺が建設される時、臺長 Voute 氏の希望の一は此の視差観測であつた。

さて、Lembang 天文臺で視差の寫真観測のプログラムは、固有運動の大きい微光星の視差を目的とし、光度は皆8<sup>m</sup>以下、赤緯は南20°乃至65°の範圍内のものとする定められ、結果は Annalen v. d. Bosscha-Sterrenwacht, Vol. VII. に載せることとなつてゐる。

下は其の第一回報告にある星である。

星	m(ph)	$\pi$ (re.)	$\mu_{\alpha}$	$\mu_{\alpha}$ (Ci 20)	$\pi$ (abs.)
CPD-46°29	11.7	+0.''041±0.''007	+0.''071±0.''007	+0.''115	
CPD-48°4791	11.5	+0.025±0.009	-0.585±0.007	-0.636	
Ci. 20, 729	14.0	+0.045±0.013	-0.770±0.012	+0.779	
Proxima Cen	13.0	+0.744±0.006 +0.86 +0.755±0.019 +0.783±0.005	-3.755±0.006 (Innes)		+0''.746  +0.758(Voute) +0.785(Alden)
CPD-46°6822	11.0	+0.032±0.007	-0.601±0.007	-0.646	
CoD -40°7021	11.2	+0.171±0.005	-1.186±0.004	-1.110	
CPD-46°7678	12.1	+0.005±0.006 +0.026±0.007	-0.010±0.007 -0.019±0.010	(Cape)	
CPD-46°7681	12.3	+0.017±0.005 +0.047±0.065	-0.395±0.005 -0.420	-0.403 (Cape)	
Ci. 20, 983	13.3	+0.050±0.007	-0.621±0.010	-0.615	
CPD-46°8664	11.1	+0.200±0.005 +0.237±0.006	+0.584±0.005 +0.585±0.008	(Cape)	
CPD-44°11909	12.9	+0.210±0.006	-0.687±0.006	-0.698	
Ci. 20, 1112	14.5	+0.067±0.010	+0.336±0.011	+0.374	
CPD-47°9196	10.9	+0.042±0.006	-0.062±0.007	-0.163	

### 二重星 $\Sigma 2$ の新軌道

有名な二重星  $\Sigma 2$  は、エイトケンの目録 ADS 第102番で、1900.0 の位置は、赤經 0<sup>h</sup>03. m8, 赤緯 +79°10', 光度6.3 及び 6.6, 分光型 A3 の星であるが、1828年に大 Struve が測観して以來、諸家の観測があり、軌道は

[Knowl. 14, 48 (1891)]	S. W. Burnham 氏,	週期 450年,
[A. N. 132, 1 (1892)]	S. v. Glasenapp, 氏,	,, 166.24,
[P. A. 25, 668 (1917)]	H. N. Russell, 氏,	,, 215.

今般, Yerkes 天文臺で, Van Biesbroeck 教授指導の下に, R. N. Van Arnam 氏が, 1930年までの観測結果を利用して, Zwier 法 [A. N. 139(1896)] により, 下の如き軌道を算出した. [A. J. 1000]

$\mu = 1.^{\circ}309$ (逆行)	A = $-0.^{\circ}6284$
P = 275年	B = 0.0215
T = 1889.8	F = $-0.3045$
a = $0.^{\circ}715$	G = 0.2860
i = $\pm 70.^{\circ}2$	
e = 0.57	
$\Omega = 166.^{\circ}8$	
$\omega = 329.^{\circ}6$	

視差を  $+0.^{\circ}007$  (Sproul 天文臺の測定) とすれば, 此の連星系の質量は, 吾が太陽の 12.5 倍となる.

## 花 山 だ よ り

去る十二月13日, 花山天文臺は葛城伯爵御夫妻を御迎へするの光榮に浴した. 丁度此の日は正午に大學工學部に火災が起り取り込んでゐたが, 事務室の松村氏も來られ, 午後1時半頃山本教授御夫妻以下臺員一同奉迎裡に伯爵御夫妻は細川候, 狩野名譽教授と共に御着きになり, 4時頃まで, 山本教授の御案内で構内を御一巡遊ばされた. 今年は六月17日に大谷光暢師御夫妻, 十月28日に久邇宮若殿下, 本日伯爵御夫妻と, 都合三度光榮に浴した次第である. 尙ほ十二月8日には賀川豊彦氏が參觀に來られた. 同15日には新城名譽教授が歸朝され, 翌16日には國際經度觀測が終了し, 20日には金星の掩蔽が觀測された. 此の日は山本教授は倉敷で觀測されたが, 花山には田邊名譽教授が來られて大ドーム室で, 臺員と共に觀測された.

十一月30日から始まつてゐた構内電柱様模替へ工事は十二月5日を以て終つた. 此れに依つて今迄本館西側にあつた變壓器は宿舍西側に移され, 電線も西側の松林にかくれて廣々とした感じとなつた. 此の工事に續いて, 十二月7日より構内弱電流送電線も模様替へ工事を起し, 今迄三角塔を電柱代りに使用してゐたのを止めて, テニスコート西側の電柱に依つて, 本館子午線館其他と連絡する事になつた. 此の工事は10日に終了した. 更に十二月19日には三角塔を取りこはし, 同22日には花山道路に標柱や自動車への注意標等各所に立てられて, 天文臺の面目が一新された感じとなつた. (星見山人)